

cultural production and its effect on vegetation cover, I was left wondering if these chapters, as most of the book, did not serve mostly the purpose on reporting on the scrutiny of large amounts of source materials, much more so than contributing to an academic debate on demography or the demography environmental link. The chapter that discusses the link between population and the environment explains why North and Central Sulawesi's landscapes have been transformed, but there are no real surprises that rock our insights on these themes. Why there were extensive grasslands in various parts of Kalimantan and Sumatra, for instance, was already known, and the grasslands of North and Central Sulawesi seem to have been created for similar reasons. Similarly disappointing is the final chapter on population and environment. It turns out a hotchpotch of historical facts and superficial interpretations related to people's resource user and links with the environment.

The book is a valuable contribution to understanding the demographic history of an important but less emphasized region of Southeast Asia. The rich use of many sources makes this a valuable book that will be useful to people interested in the region and on its archival material, much of which is only in Dutch. The important theoretical contributions are the reflections of the complex mechanisms that define a region's demographic history, but the environmental history analysis and interpretations provide few new insights. The demographic histories, distinguished for sub-regions, are a result of complicated causal interlinking of productive, social, cultural political and health factors, that are perhaps much more difficult to generalize as is often assumed. This point would have become more articulated had the volume been limited to that purpose. The chapters on environmental change and its social causes are not very articulated, and this puts into question the environmental histo-

ry project that the book attempted in addition to pursuing a historical demography project.

(Wil de Jong • Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)

Adrian C Sleight; Chee Heng Leng; Brenda SA Yeoh; Phua Kai Hong; and Rachel Safman, eds. *Population Dynamics and Infectious Diseases in Asia*. Singapore: World Scientific Publishing Co., 2006, 430p.+index.

I はじめに

総勢 36 名の執筆者による本書の土台となっているのは、2004 年 10 月にシンガポールで開催された国際ワークショップで発表された論文集である。このワークショップは、アジアの感染症について分野を超えての相互情報交換や知見交流が不足している状況を打開する試みとして、シンガポール国立大学の Asian MetaCentre for Population and Sustainable Development Analysis とオーストラリア国立大学の National Centre for Epidemiology and Population Health 共催で、アジア、オセアニア、欧米各国から 40 名を超える研究者を招いて行われた。本書は、ディシプリンを横断した知見交換や知識の共有の促進のみならず、統合的アプローチの確立に果敢に挑戦している点で、各分野の研究者に良い刺激を与える稀な書と言える。

本書は近年みられる感染症の発生傾向を説明する要因として、移動人口を構成する女性の比率の急増と都市化という近年アジア地域で顕著な 2 点に主眼をおいている。具体例として、1975 年時点で 25% を示していたアジアの都市人口が、2030 年には 53% に上昇すると予想し、急速に進行する都市化現象が人々の生活、行動や価値観、政治、経済に多大なインパクトを与えていると指摘する。さらに、このアジアの都市化による環境汚染は、今後死亡率上昇と出生率低下を加速するおそれがあると主張する。マラリアなどの薬剤耐性が懸念されるなか、HIV 感染者の結核症例が増加し、重症急性呼吸器症候群 (SARS)、高病原性鳥インフルエンザ、ニパウィルスなどの新興感染症例も加わり、広範囲化し

つつあるデング熱も深刻である。これらの人類を脅かす感染症が、社会や環境生態の変化と深く関係していることを明らかにしながら、本書は地域研究者をはじめとして、医療従事者や科学者、また保健政策、開発や環境問題などに取り組む多くの読者に、アジアの将来を考える好機を提供している。

II 各章の概要

第1セクションの序章は各章の論点を集約するとともに、アジア地域の人口の変動と感染症の増加という2点を同時に論ずる新たな試みには、ディシプリンを架橋したアプローチが必要だと強く唱える。続く第2セクションでは人口変動と感染症増加の関連を概観する。まず2章が感染源となる微生物のアジアとヨーロッパ間の移動を示し、現在第7次流行期にあるコレラなどを例に、グローバル化がアジア地域の感染症に及ぼした影響を考察しながら、人と生態系の共存の必要性を唱える。3章は地理情報システムや疫学を用い、移民が未知の感染源と遭遇した際に、過去の習慣や経験をもとに対応することが感染を増幅させていることを示す。4章は水資源汚染、食糧需要の増大、砂漠化と都市化がダム建設を助長し、世界中で20世紀に建設された大型ダムの多くが中国とインドにあると指摘する。周辺住民は居住地移動を余儀なくされ、大量の人口移動の結果急増した住血吸虫症、マラリア、肺炎や下痢などの感染症は、ダム建設で謳われる社会経済効果の負の産物であると証明する。5章はワクチンで予防可能、不可能な2タイプに輸入感染症を分類し、最適な公衆衛生政策がそれぞれ異なることを感染率モデルで説明する。6章は新興感染症対策の枢要部といえるヘルスシステムが、アジア地域では各国ごとに大きく異なる医療技術と財政状況の制約を強く受けていることに着目し、公共政策導入費用の試算と、感染症対策に必要な公的投資額の決定方法を提示する。

開発と感染症の関連を解く第3セクションでは、7章が1950年代以前に上海で蔓延した感染症に対して導入された公衆衛生施策の成功を報告する一方で、近年の新・再興感染症の発生増加傾向と、貧困層の移民に顕著な麻疹の増加傾向を示す。8章はベ

トナム北部ラオカイで社会変化が山岳地の住民にもたらした感染症拡大の影響と実態を、医療人類学的手法で巧みに描く。9章は北タイで、HIV 感染症患者とエイズ患者を支援する NGO のプログラムと医療システムが人々の移動パターンに影響し、その結果支援活動領域から取りこぼされる人々を生むことを指摘して、新たな支援プログラムの実現を唱える。10章は1985年の国内初の感染者確認以降、HIV 感染者やエイズ患者の治療や看護よりは、自己責任を強調して予防に重点を置いてきた都市国家シンガポールの最近の動向を描く。市民グループによるアドボカシーを通じて生まれた、患者たちの権利を尊重し社会活動を支持する最近の世論は、独立後の国家統合の過程で政府の影響を強く受けて形成された国民共有価値や社会概念とは明らかに違う。これは、市民の意思が政策の方向転換を促しつつあるという、この国には珍しい事例である。

人口移動と感染症の関連を究明する第4セクションの11章は、2000年に建設された、北西ラオスを通過して中国とメコン川流域やタイを結ぶ、全長74キロメートルの高速道路をとりあげる。2村落の比較分析をもとに、アイディアや人と物の移動の加速が住民コミュニティと移住者それぞれのセックスネットワークを拡大し、HIV 感染を含む性感染症の危険性を高めていると訴える。12章は中国河南省の貧困農村出身の出稼ぎ移民の結核感染に焦点をあて、疫学調査手法を応用した家計調査結果の回帰分析から結核が家計に及ぼす損失を算出した。さらにこの章は、中国農村にはびこる貧困と結核の悪循環を指摘し、患者の生活支援のための貧困撲滅プログラム導入を主張する。13章は中国南西部から都市部へ短期移住する女性を対象とする。移民という社会的立場とジェンダー的に弱い力関係が相互作用して、経済的困難をかかえる彼女たちを危険な性産業に追い込んでいる図式を示し、性感染症のリスクが高まっていると帰結する。彼女たちは数年後には出身村に戻って結婚し感染症の拡大源になる懸念があり、事態は極めて深刻といえよう。14章は毎年2百万人を超えるイスラム教徒の巡礼によって起こる混雑した環境での、結核、髄膜炎やB型肝炎などの感染症発生率の増加結果を報告し、感染症リスクと大量人口移動の関連を強く示唆する。アジア地域在住

の巡礼者がそれぞれの母国に感染症を持ち帰ることが危惧されることから、予防接種の普及を提示するとともに、国家間の公衆衛生の課題を指摘する。

SARSを比較の視点から捉える第5セクションでは、15章がシンガポールでの既存の感染症に加えて新興感染症に対する注意を喚起する。省庁を超えた危機管理体制や迅速な意思決定、実験室を発端とした感染例や国境での監視体制からの教訓は、アジア地域に参考となるであろう。16章は香港の高層集合住宅7棟で、工学的に再現した実験を行い噴霧分散感染の可能性を検証し、高層住宅の建築デザインと住宅政策に対する警告を発する。17章は、台湾の新聞報道で使われた差別表現がスティグマを形成した過程を考察し、患者や医療関係者が誹謗中傷的に据えられた要因をつきとめる。18章はマレーシア政府が感染地域への渡航注意を喚起する一方で、自国の経済損失を縮小する目的で極度なリスク回避行動を緩和しようとした2重基準が、国内の感染リスクの認識をゆがめ人々を混乱させたと分析した上で、隣国シンガポールが貫いた情報開示の姿勢を評価する。19章は植民地時代に蔓延していた感染症を1970年代にはほぼ制圧したと評価する一方で、シンガポール政府は感染症に関する表現に軍事用語を乱用したと述べる。感染拡大を国家的危機と位置づけることで、政府は自らの正当性強化と国家建設に利用したとする批判的な主張を展開する。20章はSARSによって表面化した中国政府の情報隠蔽の根源として、農村部の脆弱なヘルスシステムと民工制度を作り出した、政治経済と農村開発を指摘する。都市と農村部を行き交う大量の移住労働者は、病原菌の宿主や媒介となる危険をはらむことから、政府は近年地方レベルの公共財を増やすことで問題解決を試みてきたが、統治体制の弱さが制度改良を困難にしていると判断する。

最終章の21章は1997年に香港で発見され広範囲に拡大する高病原性鳥インフルエンザ(H5N1型)を扱う第6セクションを構成し、これまでの議論を整理した上で、本書の総括の役割を果たす。ヒト-ヒト感染の発生は多くの人命と経済損失、そして膨大な医療費を意味する。国境を越える人々の移動の加速と、各国を取り巻く感染症対策の制約や差異を熟考すると、新型ウイルスの産出地になるか、もし

くは甚大な被害が予想されるアジア地域において、それぞれの国ごとの解決に委ねていては感染症拡大を阻止できないと指摘する。アジア全域でヘルスシステム強化のために必要な投資を支援しようという、一刻も早い決断を呼びかけて本書の主張をまとめている。

III 本書の批評と特筆点

本書はこれまで同時に扱われることが少なかったアジアの人口構成の変動と感染症という2事項について、医学、歴史学、社会学、人類学、地理学、経済学、政治学、工学や数学など多分野からの理論的そして実証的研究を統合している。しかし視座の多様性を活かしきれずにテーマが開発や経済に傾斜しすぎている章や、理論重視で実証研究を欠く章もみられる。また統合的アプローチであるがゆえに、16章の実験のように建築学の知識が乏しい読者には難解な分析結果も含まれている。現代問題を扱う研究がしばしば直面することだが、最新のデータを提供できていない箇所や、政治環境の制約から裏づけが弱いデータもある。とくに統計分析で比較の妥当性を高めるためには、人口増減に起因する症例の詳しいデータを収集することが今後の課題であろう。感染症を病名別に考察する際には、伝統医療が普及している地域での診断基準が、近代医療とは必ずしも一致しないことにも留意するべきである。また13章では移民、性産業従事と都会での孤立などの要素の因果関係が特定されないまま分析が進められるため、複数の指標を使った豊富な聞き取り調査にもかかわらず、結果の解釈に疑問の余地を生みかねない。19章はシンガポール政府が意図的に軍事用語を感染症対策に適用して政治利用したとするが、病気と闘うなどの表現はごく一般的に使われることから、この批判が適当かどうかは読者の意見が分かれるところであろう。

とはいえ、本書が明瞭な警告や具体的な提言を数多く唱えている点は評価に値する功績だろう。たとえば、人間の活動が起因となっている環境破壊に対する政治的な無知や否認の指摘をはじめとして、健康政策の比較研究の必要性を説く姿勢や、地域全体を視野に入れた提案を主導する論旨には、アジアの

書 評

医療体制向上や国際協調の重要性の熟考を促す説得力がある。これまでの先行研究の多くは、家畜との共生や人口密集を理由に、東南アジア地域が感染症の発生現場になりやすいと指摘するにとどまっている。しかし、本書はアジア地域での国境を越えた人々の移動急増と規模の拡大、並びに急速に進む都市化現象が、環境生態系に多大な影響を与えている

ことを明確にしている。そのうえで、多方面のディシプリンの立場から行われた研究成果を統合することで、人口構成の変容と感染症の複雑な関係を見事に浮き彫りにし、アジア全体の問題解決を試みている点が画期的と言えよう。

(吉川みな子・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)